

思い出の名曲名演

・チェコフィルハーモニー管弦楽団が来日した。三〇年ほど前のことである。

伝説の指揮者、クーベリックを伴っていた。

クーベリックは、二十歳そこそこでチェコフィルの常任指揮者に就いたが一〇数年後三十歳半ばで、第二次大戦後に起きた共産化に反対して英国に亡命。その四〇年後、大統領のたつての要請で漸く故国に復帰を果たす。七十六歳になっていた。

そして「プラハの春」音楽祭でチェコ民族音楽産みの親であるスメタナの「わが祖国」の歴史的演奏を実現した。チェコ国民の待ちに待った瞬間でもあったに相違ない。

その「わが祖国」を、クーベリック本人のタクトによって赤坂サントリーホールで聴くことができた。

そこに至る歴史を知って臨んだ演奏会であったので、何とも言いようのない感銘を受けた日となった。

その十日後、

今度は、渋谷オーチャードホールで名誉指揮者として帯同していたノイマンによるチェコの名作曲家ドヴォルザークの「チェロ協奏曲」を聴いた。

全チェロ協奏曲中の歴史的最高傑作といっても異論のない名曲といわれている。

冒頭のクラリネットによる短調の主題から、いきなり心を掴まれた感じがあって、数分後のチェロで鳥肌が立った。

ほぼ四〇分の演奏時間中、我を忘れて聞きほれた。

こんな経験の演奏会は後にも先にもない。生演奏の醍醐味であった。

なお、この2回の演奏会のどちらであったのか覚えていないが、僕ら夫婦より若干後ろの席で聴いていた紳士がえわれて舞台上がった。そして指揮者と握手をした後、客席に向かつてお辞儀、指揮者と手と手を取り合ったひと時があった。紳士は、小澤征爾さんであった。

・八十年代半ばバブル景気が始まって、音楽会にも大きな変化が起きた。コンサートホールが各地に造られ、海外から高名な音楽家や楽団が頻繁に招かれるようになった。その華となったのが、世界的に著名な歌劇場の引越し公演であった。

僕らも四年続けての通しチケットを得た。かなりの大枚であったが、経済バブルのご時世ですっかりお金に麻痺したような感覚で手に入れたものだった。

初年度英国ロイヤル・オペラにはじまって、2年目ベルリン・ドイツ・オペラ、3年目ウィーン国立歌劇場、4年目ミラノ・スカラ座と続いた。演目、フィガロの結婚や椿姫など十二公演を観た。

オペラ歌手はもとより、その演出を際立たせる衣装や、背景・装置・照明の舞台美術、そしてピット内のオーケストラとそれを率いる指揮者に至るまで、世界的なレベルを結集した総合舞台芸術がそっくり来日したのである。

そして、その芸術に酔いしれる筈であった。
ところが、である。

(恥ずかしながら) 舞台上部の左から右へ流れる歌詞の字幕(翻訳)を追っつに忙しくて、この舞台を楽しむ余裕がまるで無かったのであった。

しかし、わが五感はどうぶりと浸れたと思う。それは確かであった。(念のため)